

学校運営協議会 特別支援教育地域推進部会 会議録

開催日時	令和5年10月2日（月）10：40～11：50	
会場	本校教育相談室	
出席者数	学校運営協議会委員 2名	学校 2名
出席者氏名	委員C（相談支援事業所相談室ひかり 相談員） 委員D（今金町保健福祉課主幹 保健師）	・支援部長 山田 みゆき ・総務部長 内田 義文
記 録		
<協議の柱> ○外部支援、CO としての実績報告とその課題について共有し、外部支援的な部分でのこれから学校としての対応や心構え。 ＊別紙資料（令和3年度コーディネーター業務月別回数） ○事務局員 「昨年度は、子ども子育てプロジェクトにおいて、子ども発達支援センターとこども園が協力し、こども園の先生が小学校1年生の支援を行っている。（昨年度より継続）5歳児健診は今年度も継続して参加させていただいている。北村様もコーディネーターの経験があることから役割を理解いただいている。という話をさせていただいた。関係機関と連携して取り組むことができたところではあるが、今年度、そしてこれから先のことについてご意見をいただきたい。」 ○委員D 「パートナー・ティーチャーについて、R3はあるが、R4、R5がない学校があるのはなぜなのか？支援が必要でないわけではないと思うが…」 ○事務局員 「教育支援委員会の中でも、不登校対応ケースもあるので、つながりがいいわけではない」 ○委員C 「乙部町の保護者で、今金町は学校や卒業後の社会資源が揃っているの見学をしたいということで、見学に来てもらったケースもある。普段話を聞く機会がなく丁寧な説明が分かりやすかったなど、保護者はそういう機会を待っている。檜山の子は進路希望がほとんど今金になる。近くに住んでいても知らないことがあると思う。自分は卒業後の生活について主にかかわってきている。寄宿舍生活を希望しなくなったという話を聞くことがある。寄宿舍を希望しないと今金に進学ということにはならないだろう。寄宿舍離れ、GH 離れから、親がアパートを借りて、卒後の3年間を一緒に生活するという状況もある。集団生活・共同生活が今の子ども達には難しくなっている。特に発達障害の子どもが増えてきており、協働で同じものを使えないなどの特性をもった子どももいるのではないかと？寄宿舍だけではなく GH が嫌という子どもが増えた。共同でお風呂を使わなければならないことに違和感がある子もいる。親は規則正しい生活習慣を身に付けるためにも寄宿舍や GH に入ってもらいたいと思っているが、子どもが拒否をする。」 ○事務局員 「函館の中3の生徒の一人も寄宿舍は嫌だと言っていたが、オープンウィークに何度も来校し本人の気持ちも変化し、今金でがんばるという生徒もいた。寄宿舍生活を楽しめるように行事も行っている。これまでは、大人が主導で進めていたが、学校の生徒会のような舎友会で、生徒が案を出し合い、夏はサマーフェスティバル、冬はウィンターフェスティバルという大きな行事を行っている。」 ○委員C 「学校での経験が次に活かされていくといい。同年齢ではなく、年上、年下と住むことになるので、その影響で余暇を自分たちで楽しむ経験を積んでいるはずなのに、活かされていない。社会人になった後の個人で楽しむものがスマホになっている。」 ○事務局員 「スマホも以前は寄宿舍で使えなかったが、今は週に3～4回1時間程度使えるようになっている。パンの日など、余暇の内容も増えてきている。女子の寄宿舍生が少ないので、将来の GH を見据えて個		

室で対応するなど、女子棟では工夫をしているが、男子は難しい。生徒の状況によっては、これまで年間とおして同じ部屋だったものを、学期ごとに部屋替えをしている。各学校の先生方には、小学校のうちから見学等に来てくださいと伝えているが、実際はハードルが高いのか中2、中3になってから見学に来て驚く家庭もある。檜山北部での合同学習では、楽しかったという感想も聞かれるため、そういうところから、興味をもってもらえると良い。」

○事務局員

「体験に来た男子生徒で、最初は檜山北高校に進学を考えていたが、作業体験をとおして今金への進路を希望したいと話している。」

○委員C

「本人もそうだが、親も行けるなら普通高校に…という思いがある。どちらに進むのが正解というわけではなく、その子にとってどっちがあっているのか、普通高校に進むのであれば、3年後の希望をもって進んでほしい。高校に行くことが目的になっていて、その先のことが見えていない。今までかかわってきた中で、普通高校よりも特別支援学校のほうがハードルが高いと感じているケースもある。行けるなら、普通高校に3年間通って、みんなと一緒に普通に過ごしたい、障害者としてではなく普通に生活したいという思いはみんなもっていると感じている。先程のように、体験してみたら特別支援教育のほうがいいということもあるので、選択の幅が広がっていいと思う。」

○事務局員

「普通高校に行ったが、特別支援学校に行っておけばよかったというケースはあるのか？」

○委員C

「行っておけばよかったというより、特別支援学校に通っていたほうが働けるようになったかもしれないという話は聞く。働くことについては、普通高校では教えてもらうことが少ないので、特別支援学校に通っていたら、就職につながったかもしれないという話を聞く。普通高校で3年間通っても、勉強も周りについていけないと次の進路が選択できない、就職試験を受けても落ちてしまう。中には試験を受ける前から、自分は就職できないという生徒もいる。福祉事業所に行った結果、自分には福祉的就労のほうが合っていると気付いた卒業生もいる。」

○委員D

「中学校3年間は特別支援学級で普通高校に進学し、療育手帳の再判定で外れてしまった生徒もいる。檜山北高校が柔軟に様々な実態の生徒を受け入れられる学校だから、保護者も迷ってしまう。それ自体が悪いことではないが、卒業した後どうするかを考えたときに、養護学校の魅力は分かってほしい。」

○委員C

「高校を卒業して町内で一般就労をした人もいて、仕事が上手いかなくなって相談にくることもあるが、今養で一般就労している人もいるという情報があると、今養でいろんなことを学んだほうが良かったという声もある。15歳では決められないので、友達と一緒にいたいという気持ちで決める生徒が多いと思う。コーディネーターは色々な情報を発信していると思うが、ボーダーの方にはなかなか届かない。」

○事務局員

「最近発達障害の生徒の入学も増えてきているが、入学当初に比べると時間の経過とともに落ち着いてきている。自分と話が合う人がいないということで登校に結び付かない生徒もいたが、寄宿舎で先輩とのかかわり上手く行って、乗り切ってきた。」

○委員C

「GHに空きがなく、地域での生活を希望しているのに制度上の問題もあり、受け入れることが難しくなっている。以前、3～5人くらいを一度に受け入れていたときは、学校からの引継ぎでは生活の問題はないということだったが、いざ受け入れてみると基本的な生活習慣が身に付いていない卒業生がいた。特に発達障害の生徒は、寄宿舎ではできていても、社会に出て自分一人の空間になった途端にできなくなってしまうというケースが多い。決められた生活が送れているから、生活ができるということではない。発達障害の生徒への支援をもう少し取り組んだほうがよい。」